

母親の自己イメージと育児不安に関する研究

片山綾子・奇 恵 英

Images of Maternity and Childcare Anxiety

Ayako Katayama · Hyeyoung Ki

Recently the problem of mother's childcare is indicated in terms of traditional wisdom, for example, ruin of motherhood or lack of maternity. But we need to understand mother's childcare and mentality not only from a conventional point of view, but from mother's own reality and consciousness of motherhood or maternity.

The aim of the present study is to examine that the differences in images of maternity among the following 3 points of view; Past Self-image (before marriage), Present Self-image (as a mother) and General-image (stereotypical image), then to explore the relation between childcare anxiety and the gap of maternal images from the 3 points of view. As a result, the mothers who have General-image strictly perceive the gap between General-image and Present-image, and the mothers who feel the gap strongly among the maternal images recognize the anxiety in childcare.

In consideration for these results, being mother is the process of the shift in identity, and it may well cause conflict and anxiety over adapting herself to change from the individual to the mother with social responsibility. Even though conventional maternity signifies as a stable model for reference, the flexible stance on understanding and accepting the difference among individuals may helpful to support mother's childcare.

問題と目的

様々な社会的状況の変化やそれに伴う生活及び価値観の変化などから、現代は子育て困難の時代ともいわれている。原田（2006）は20年前の母親の子育てに関する意識と現在の母親の意識を比較検討し、子育てに関して「不安」を示している、3歳児を持つ母親の割合は42%から76%へと大きく増加していることを示している。同時に、虐待や子育てに関する相談の増加といった現実的な問題に対して、「子育て支援」が全国的に取り組まれるようになり、子育て支援のあり方が模索されている中（川崎ら、2004；原田、2006；田中、1997）、子育て不安の心理に関する理解に基づいた有効な支援のあり方が望まれている。

従来の研究において取り上げられている「育児不安」に関連する要因は、ソーシャル・サポートや母親の育児環境といった環境的要因と自己概念や母性レディネスなど母親自身の内面的意識や態度といった要因に大別される。そもそも育児不安は“ちょっとした心配事から自分を否定するような深刻なものまで、人によって様々”（川崎ら、2004）であり、厳格に定義づけられるものではなく、主観的実感に基づくものであることを考慮すると、母親自身の内面的要因に関して十分な理解が必要であると思われる。

芝（2002）は「母親意識」に着眼し、母親の養育態度は母親の出生順位やきょうだい関係、性別役割同一性、両親の養育態度に影響を受けていることを示した。子育てに影響すると思われる母親意識はすでに母親の成長期に

形成される個別的要因であるといえるが、それが母親の持つ子育て不安にどの様に結びついてきたのかについては十分に言及がなされていない。一方、山崎（1997）は母親の自己概念を「母親としての自己」・「母親として以外の自己」に分け、この両者の調和の重要性を述べている。しかし、「母親である」現実には現在のその人のあり方の全体を示すもので、「母親として以外の自己」を取り出すことは困難であると思われる。なお、「母親である」現在のあり方は、母親になる前の自分のあり方から連続性をもつもので、母親になることによって起こる変化やその受容の問題が子育てへの適応や育児不安と深く関連するのではないかと思われる。

母親イメージを整理したものとして、蘭（1988）は未婚女性を対象に、「母親のイメージ」と「自分が目指す母親イメージ」との関連を検討し、社会一般的なイメージとしての「母親らしさ」のイメージがあることを明らかにした。ここでいう「母親のイメージ」とは、社会一般に共有されているものであり、いわゆる「3歳児神話」や「母性神話」のように、あたかも「母親らしい」理想像を思い描いたものであるといえよう。3才までは母親の手で育てるべきという「3歳神話」が“様々な理由で乳幼児を預けて働き続けねばならなかった母親たちに強い罪悪感をもたせた”（柏木ら、1995）ように、「母親らしさ」といった理想的イメージと実際の母親としての自己イメージの間のズレが社会的圧力として葛藤をもたせると同時に、自信のなさや自責感といった子育て不安を助長する心理的影響を与えることが推測される。

以上のことから、本研究では、「母親」を捉える視点

を、過去の「母親になる前の自分」と現在の「母親である自分」といった母親の主観的視点の側面と、社会から期待されていると思われる「一般的な母親」といった社会的視点の3つに区分し、各視点による母親の自己イメージのあり方と育児不安との関連を明らかにすることを目的とする。

方法

- 1) 対象：保育園及び育児サークル参加者
- 2) 調査方法：保育園や育児サークルを訪問し、242名に質問紙を配布し、後日133部を回収した（回収率55%）。うち有効回答者数は129部であった。
- 3) 調査内容

- ①フェイスシート（年齢、同居家族、子どもの人数と年齢、育児サポーターの有無、育児支援への参加の有無）
- ②子育て不安：「育児不安尺度」牧野（1982）より12項目を選定し、作成。
- ③母親イメージ尺度：蘭（1988）が作成した母親イメージを元に、先行研究（大日向、1977）等を参考にし、一般的な母親イメージに合致する26項目を選定し、作成。

結果

- 1) 「母親イメージ」尺度の因子分析結果
「母親になる前の自分」・「母親である自分」・「一般的な母親」の3つの視点を合わせた全体的な母親イメージ

表 「母親イメージ尺度」の因子分析（バリマックス回転後）

	I	II	III	IV	V	共通性
第1因子（母性的母親像）						
明るさ	.790	.228	.910	-.037	.092	.695
暖かさ	.777	.179	.219	.086	.053	.694
集団中心	.594	-.196	.148	.146	.072	.348
世話焼き	.530	.108	.328	-.210	.047	.663
器用さ	.513	.294	.088	-.084	.453	.687
投げり所	.474	.425	.416	-.003	.118	.667
第2因子（父性的母親像）						
強さ	.379	.708	.127	.041	.019	.663
信念の強さ	.097	.682	-.013	.248	.061	.736
たくましさ	.470	.673	.091	.030	.060	.687
頑固さ	-.188	.671	.139	-.075	.027	.512
楽観的	.139	.593	-.023	.357	-.115	.571
安定性	.552	.557	.125	.105	.161	.667
能動的	-.047	.406	-.133	-.092	-.386	.342
第3因子（伝統的母親像）						
献身的	.402	.054	.727	-.008	.060	.696
家族中心	.291	.145	.670	.110	-.065	.571
忍耐的	.064	.157	.670	-.125	.282	.572
自己犠牲的	.126	-.053	.639	-.058	.084	.438
包容的	.485	.190	.566	.101	.124	.671
補佐的	-.175	-.219	.530	.326	.168	.494
第4因子（おおらかな母親像）						
干渉的	.164	-.317	.890	-.700	.007	.625
こだわりのなさ	.086	.199	-.040	.624	-.297	.526
のんびり	.047	.033	.081	.580	.090	.354
やさしさ	.360	-.110	.111	.439	-.034	.348
第5因子（理性的母親像）						
理性的	.179	.121	.350	.126	.820	.736
常識的	.021	-.110	.209	-.215	.696	.587
寄与率	14.747	13.191	11.629	7.783	7.522	

太字は因子負荷量.40以上

尺度の得点をもとに因子分析を行った結果、因子負荷量が.40に満たない1項目を除外し、25項目を解釈し、5因子が抽出された(表1)。第1因子は「暖かさ」・「明るさ」・「拠り所」などの内容で、包み込む暖かさなどを表わすことから、「母性的母親像」と命名した。第2因子は「強さ」・「頑固さ」・「能動性」といった従来の男性的イメージを表わす内容から「父性的母親像」と命名した。第3因子は「献身的」・「忍耐的」・「自己犠牲的」・「補助的」といった旧来の神話的母親を想起させる内容から「伝統的母親像」と命名した。第4因子は「干渉的」という項目が負の意味をもつことから、「放任的」と改名し、その他「こだわりのなさ」・「のんびり」といった内容から「おおらかな母親像」と命名した。第5因子は「理性的」・「常識的」といった内容から「理性的母親像」と命名した。

2) 3つの視点による母親イメージの比較

被験者内の3つの視点、すなわち、過去の「母親になる前の自分」、現在の自分の実感に基づいた「母親である自分」及び社会一般に描かれている「一般的な母親」のイメージのあり方を比較するため、反復測定による1要因分散分析を行った結果、主効果がみられ ($p < .05$)、多重比較による下位検定を行った結果、「一般的な母親」の視点から捉えた母親イメージが「母親としての自分」および「母親以前の自分」の視点より有意に高く ($p < .5$)、「母親としての自分」の視点が「母親以前の自分」の視点より有意に高かった ($p < .5$)。(Figure 1)

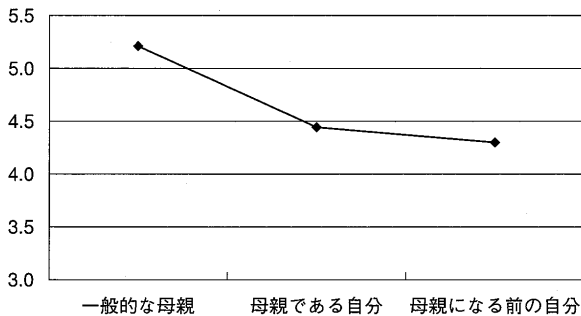


Figure 1 3つの視点における母親イメージ

3) 「母親」を捉える3つの視点における母親イメージの内容的分析

① 「母性的母親像」について

被験者内の3つの視点(「母親になる前の自分」、「母親である自分」、「一般的な母親」)から捉えた「母性的母親像」の違いを比較するため、反復側的による1要因分散分析を行った結果、主効果がみられた($p < .001$)。多重比較による下位検定を行った結果、「一般的な母親」が「母親としての自分」及び「母親になる前の自分」より「母性的母親像」が有意に高かった ($p < .05$)。(Figure 2)

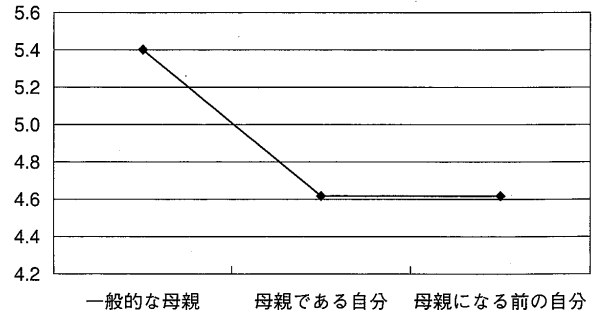


Figure 2 3つの視点における母性的母親像

② 「父性的母親像」について

被験者内の3つの視点(「母親になる前の自分」、「母親である自分」、「一般的な母親」)から捉えた「父性的母親像」の違いを比較するため、反復側的による1要因分散分析を行った結果、主効果がみられ ($p < .001$) 多重比較による下位検定を行った結果、「一般的な母親」が「母親である自分」および「母親になる前の自分」より「父性的母親像」が有意に高く ($p < .05$)、「母親である自分」が「母親になる前の自分」より有意に高かった ($p < .05$)。(Figure 3)

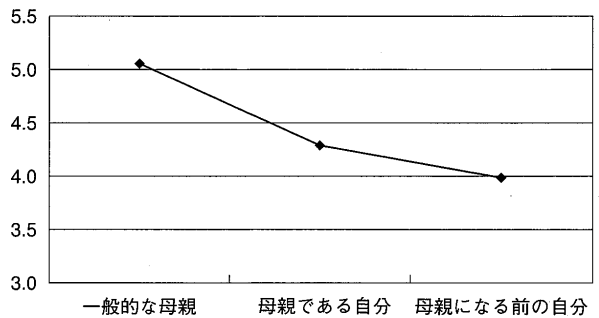


Figure 3 3つの視点における父性的母親像

③ 「伝統的母親像」について

被験者内の3つの視点(「母親になる前の自分」、「母親である自分」、「一般的な母親」)から捉えた「伝統的母親像」の違いを比較するため、反復側的による1要因分散分析を行った結果、主効果がみられ ($p < .001$) 多重比較による下位検定を行った結果、「一般的な母親」が「母親である自分」および「母親になる前の自分」より「伝統的母親像」が有意に高く ($p < .05$)、「母親としての自分」が「母親以前の自分」より有意に高かった ($p < .05$)。(Figure 4)

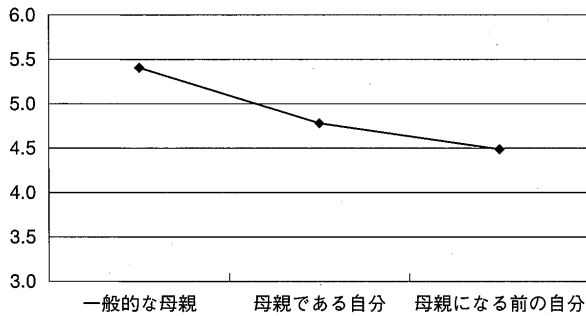


Figure 4 3つの視点における伝統的母親像

④「おおらかな母親像」について

被験者内の3つの視点（「母親になる前の自分」、「母親である自分」、「一般的な母親」）から捉えた「おおらかな母親像」の違いを比較するため、反復側による1要因分散分析を行った結果、主効果がみられ ($p < .001$) 多重比較による下位検定を行った結果、「一般的な母親」が「母親である自分」および「母親になる前の自分」より「おおらかな母親像」が有意に高かった ($p < .5$)。 (Figure 5)

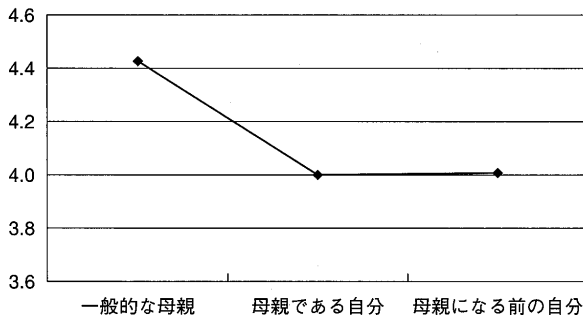


Figure 5 3つの視点におけるおおらかな母親像

⑤「理性的母親像」について

被験者内の3つの視点（「母親になる前の自分」、「母親である自分」、「一般的な母親」）から捉えた「理性的母親像」の違いを比較するため、反復側による1要因分散分析を行った結果、主効果がみられ ($p < .001$) 多重比較による下位検定を行った結果、「一般的な母親」が「母親である自分」および「母親以前の自分」より「自立的母親像」が有意に高く ($p < .05$)、「母親になる前の自分」が「母親である自分」より有意に高かった ($p < .05$)。 (Figure 6)

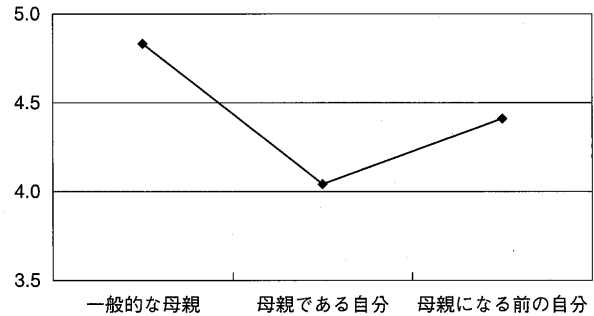


Figure 6 3つの視点における理性的母親像

4) 育児不安と母親イメージの関連

①育児状況と育児不安の関連について

母親の年齢、同居家族、子どもの人数と年齢、育児サポーターの有無、育児支援への参加の有無といった育児状況的要因をそれぞれ独立変数とし、育児不安を従属変数として1要因分散分析を行い、その関連を検討したが、育児サポーターの有無によって育児不安が変化する傾向が見られたものの、その他の要因では有意差がみられなかった。

②育児不安と「母親になる前の自分」イメージの関連について

独立変数として「母親になる前の自分」イメージの得点の平均から高・低群を設定し、育児不安の得点を従属変数に1要因分散分析を行った結果、「母親になる前の自分」イメージ高群が低群より育児不安が低い傾向がみられた ($p < .1$)。

③育児不安と「母親である自分」イメージの関連について

独立変数として「母親であり自分」イメージの得点の平均から高・低群を設定し、育児不安の得点を従属変数に1要因分散分析を行った結果、「母親である自分」イメージ高群が低群より育児不安が有意に低かった ($p < .001$)。

④育児不安と「一般的な母親」イメージの関連について

独立変数として「一般的な母親」イメージの得点の平均から高・低群を設定し、育児不安の得点を従属変数に1要因分散分析を行った結果、有意な差はみられなかった。

⑤育児不安と「母親である自分」・「一般的な母親」イメージのズレとの関連について

「一般的な母親」イメージの高・低群と「母親である自分」イメージの高・低群を合わせ、「一般的な母親」イメージと「母親である自分」イメージの間にズレがある群の設定を試み、「一般的な母親」イメージ及び「母親である自分」イメージがともに高い群（以下、「理想的な一致群」）、「一般的な母親」イメージが高く、「母親である自分」イメージが低い群（以下、「自己卑下群」）、「一般的な母親」イメージが低く、「母親である自分」イメー

ジが高い群（以下、「自己充実群」）、「一般的な母親」イメージ及び「母親である自分」イメージがともに低い群（「イメージ希薄群」）が抽出された。これら4群を独立変数、育児不安の得点を従属変数に1要因分散分析を行った結果、群間に主効果がみられ（ $F(3, 125) = 7.232, p < .001$ ）、多重比較による下位検定を行った結果、「理想的一致群」が「イメージ希薄群」より育児不安が有意に低く（ $p < .05$ ）、「自己充実群」が「自己卑下群」に比べ、育児不安が有意に低かった（ $p < .05$ ）。「理想的一致群」と「自己充実群」、「自己卑下群」と「イメージ希薄群」の間には差が見られなかった。（Figure 7）

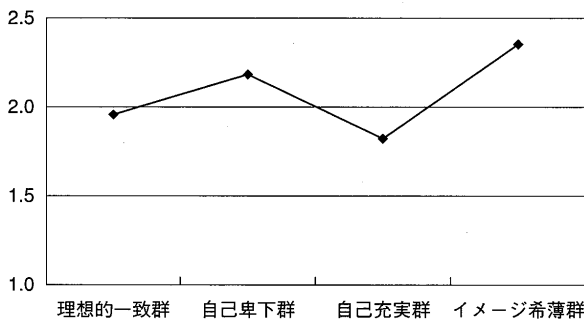


Figure 7 母親イメージのズレと育児不安

考 察

1) 「母親」を捉える3つの視点における母親イメージのあり方について

社会的に認識されている「一般的な母親」は、一般に思われている「母親らしさ」を意味していることが考えられ、「現在の母親としての自分」や過去の「母親になる前の自分」より、母親イメージの全般及び具体的な内容において高い得点を示したのは当然の結果といえる。言い換えれば、母親の役割に関して“母親一般が一定の構えを持っており、母親になり、自分自身とは別の「母親としての役割」を担っていくことについての「主観」を自分自身の中に持っている”（河合、1991）ということが示され、母親になることによって、社会的通念や自分のあり方を融合させながら、自分なりの母親のあり方を確立していく過程があると推察できる。

その一方で、いわゆる「母親らしさ」といったイメージに自分を照らし合わせ、比較することによって、現在の母親としての自分とのズレが生じ、社会的に見られている自分像と主観的に体験する自分像の間で圧力や葛藤を感じることが考えられる。しかし、「母親になる前の自分」に比べると、現在の「母親である自分」のイメージが確立されており、現状に適応して変化していくと同時に、一般的な「母親らしさ」を取り入れつつ育児の最中には常に揺れ動かざるを得ない母親の姿が垣間見られたといえよう。

母親イメージの内容の具体的な検討からも、「母性的

母親像」、「父性的母親像」、「伝統的母親像」、「おおらかな母親像」、「理性的母親像」のすべてのカテゴリ「母性的母親像」と「おおらかな母親像」では母親になる前の自分と母親になったあとにおいて「一般的な母親」イメージが「母親である自分」や「母親になる前の自分」イメージに比べて高い得点を示したことから、それぞれのカテゴリがいわゆる「母親らしさ」を象徴するものであり、自ずと「一般的な母親」イメージに合致するのであることがうかがえる。

その中で、「母性的母親像」や「おおらかな母親像」においては「母親である自分」と「母親になる前の自分」イメージの間には差がみられず、「父性的母親像」や「伝統的母親像」においては差が見られたことから、女性の立場から「母性」に関しては、母親になる前から親和性があり、結婚による生活の変化から結婚前の自分を「おおらか」と捉えやすいことが考えられる一方、「父性的母親像」や「伝統的母親像」に関しては社会的位置づけや親としての責任ある立場から育児の中で身に付けざるを得ない性質であることが示されたといえる。なお、「理性的母親像」は「母親になる前の自分」イメージに比べ、「母親である自分」が低いことから、育児という喜怒哀楽に満ちた生活の中で、感情的にならざるを得ない母親の現実が表れているのではないだろうか。

2) 母親イメージと育児不安の関連について

子どもの年齢、母親の年齢、育児サポーターの有無など、育児環境的要因と育児不安の間には関連がみられず、「母親である自分」イメージが「母親らしい」母親イメージから離れている場合、そうでない人に比べ育児不安が高いことから、育児不安に影響を与える要因として環境も重要であるが、母親自身の主観的捉え方、特に自分のあり方の受け止め方が育児不安を考える際、重要な要因であることが示された。

「一般的な母親」イメージと「母親である自分」イメージが理想的に一致している母親は母親としての役割やあり方に対して既存のイメージを持ち、それに自分を同一化し育児をこなしているといえるが、母親イメージが希薄である母親の場合、母親のイメージ、さらに、母親のモデルとなるものを持たず、母親であることへの違和感を持っていることが子育て不安につながるのではないかと思われる。一般的な「母親らしさ」のイメージを持ちながら、自分がそれに相応していないと感じる自己卑下的な母親は自分がうまくやれているのであろうかという懸念が子育て不安につながるものが容易に推察できる一方、一般的な「母親らしさ」のイメージは持たないが、自分自身のあり方が自ずとそれに近いと感じる母親は自分なりのあり方をもち、自分らしく接するすべを得ることから、前者に比べ、子育て不安が低い結果になったのではないかと思われる。

「理想的一致群」と「自己充実群」間の子育て不安の

低さの程度、また、「自己卑下群」と「イメージ希薄群」子育て不安の高さの程度には有意な差がなかったことから、母親の背景やあり方には個人差があるにせよ、一般的な「母親らしさ」のイメージと自分のあり方が一致するかしないか、あるいは、ある程度モデルとなりうる「母親らしさ」のイメージを持っているかいないかによって、子育て不安のあり方が影響されることがうかがわれた。

まとめ

以上のことから、母親になることは社会的存在としての意味を含めた自己のあり方の変化であり、その受容と適応の過程において子育て不安が生じることが考えられる。その際、いわゆる「母親らしさ」のようにモデルとなるイメージをもつことが一つの指標となり、子育てを支えることが考えられる一方、それによって、自己のあり方が規定され、不一致を感じざるを得ない場合は子育て不安を助長するものになりうることも考えられる。一般的に「母親らしさ」というある程度安定したイメージを持ちながらも、それに捕らわれず、一人一人のあり方やその違いを受容するといった柔軟な姿勢が子育て不安を理解し、支える一つの視点になると思われる。

【参考文献】

- 蘭香代子 (1989) : 母親モラトリアムの時代 北大路書房
大日向雅美 (1988) : 母性の研究 川島書店
柏木恵子・高橋恵子編 (1995) : 「発達心理学とフェミニズム」、ミネルヴァ書房、p65
河合隼雄 (1991) : イメージの心理学 青土社
川崎裕美、海原康孝、小坂忍、出路愛、片野隆司 (2004) : 小児保健研究 第63巻、第6号 (667~673)
芝 誠貴 (2002) : 母親意識に関する研究
田中昭夫 (1997) : 幼児を保育する母親の育児不安に関する研究. 乳幼児教育学研究第6号 (57-64)
原田正文 (2006) : 子育ての変貌と次世代育成支援—兵庫レポートにみる子育て現場と子ども虐待予防. 名古屋大学出版会
山崎あけみ (1997) : 育児期の家族の中で生活している女性の自己概念—「母親としての自己」・「母親としての自己以外」の分析—. 日本看護科学会誌、17 (1-10)